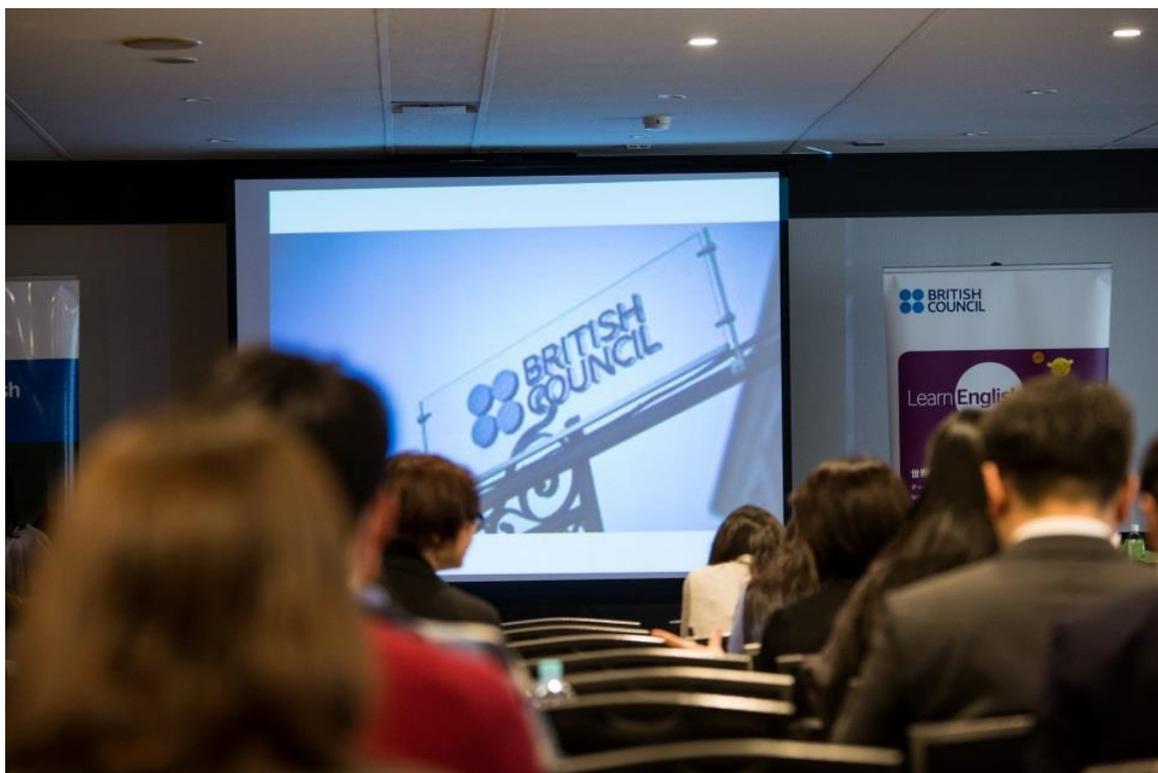


「CAN-DO リストと指導・評価の一体化」 セミナーレポート



- 日 時** 2017年1月29日(日) グランフロント大阪(大阪)
2017年2月12日(日) TKP市ヶ谷カンファレンスセンター(東京)
- 主 催** ブリティッシュ・カウンシル
- 後 援** 文部科学省

「CAN-DO リストと指導・評価の一体化」セミナーを開催

グローバル化が進む中、小・中・高生を対象とした英語教育の現場では、学習者が英語を実践的な場面でも運用することができる力を身につけられるように様々な改革が行われている。その取り組みの一つとしてあるのが、「英語を使って～することができる」という観点から「CAN-DO リスト」を作成し、具体的な目標を設定した上で授業を進めていくというものだ。この方法は、学習者の英語力を総合的に育成することやコミュニケーション能力を向上させることだけではなく、教える側の指導方法と評価の工夫・改善にもつながるということで注目を集めている。こうした中、ブリティッシュ・カウンシルは大阪(1月)と東京(2月)で、英語教育が直面している「CAN-DO リストと指導・評価の一体化」という課題についてのセミナーを開催し、全国から約 250 名の教員および教育委員会関係者が参加した。



タスクを中心とした指導と評価

今回のセミナーは、講演、実践報告、ワークショップという3部構成で行われた。第1部の講演を行ったのは、明治大学国際日本学部教授の尾関直子教授だ。「CAN-DO リストに基づいた指導とパフォーマンス評価」と題し、「言語で何かをする」ということを強調している CAN-DO リストを使用した指導方法の中で、特に代表的な「タスクを中心とした教授法(Task-based instruction)」について説明した。

尾関教授は、そもそも「タスク(task)」とは何なのかを、しばしば混同される「エクササイズ(exercise)」と比較しながら説明するところから話を始めた。エクササイズが一般的に文法に関するものであるのに対し、タスクは以下の特徴をもつ。

- (1) 内容や意味、メッセージに重点を置き、
- (2) 生徒が好きな言語を使用することができ、
- (3) 何らかのゴールを目指し、
- (4) 生徒間に必ずインタラクション(やり取り)があり、
- (5) 現実社会に起こり得ることを教室内に再現する

例えば、to 不定詞や too~to といった文法を確認するための穴埋め問題や、単純に文を暗記して行うロールプレイングなどは、生徒が目指すはっきりしたゴールなどが設けられていないためエクササイズとなる。一方「教師に相応しい人間とはどんな人がグループで考える」などといった特定の目標が設定されている課題はタスクとなる。参加者たちは普段それぞれが行なっている指導法を振り返りながら、尾関教授の投げかける問いに対し、積極的に意見を述べていた。

続けて尾関教授は、パフォーマンス評価(Performance Evaluation)について話を進めた。パフォーマンス評価は、コミュニケーションを重要視するオーセンティック・アセスメント(Authentic Assessment)に用いられる3つの評価(Performance Evaluation/Self-Evaluation/Portfolio Evaluation)の中の1つであると説明し、実際にパフォーマンス評価を行うためのテストが従来のテストといかに異なるかを解説した。一般的に、従来のテストは並べ替えや True/False 問題などの「正答が1つで点数化しやすい」ということが特徴的だが、パフォーマンス・テストは複数の回答が可能であり、「論理的思考」などの高度な認知能力に重点を置いていると尾関教授は説明した。しかし、そのようなテストは評価に時間がかかるだけでなく、評価を行う教員に評価基準の設定がゆだねられる事が多いため、皆が納得する評価を得られる事が少ないと述べた。そのため、評価基準はできるだけ複数人で決めた方が良くと付け加えた。

尾関教授は参加者たちとの受け答えを基本的に英語で行いながら講演を進めた。今回のセミナーの参加者の多くは現在全国の小中高で実際に英語を担当している教員の方々の、どの参加者も英語でのやり取りや質疑応答に積極的に参加していた。今回の講演の内容は、英語教育に携わっている参加者にとって興味深いピックだったようで、皆尾関教授の講義に真剣に耳を傾けながら、他の参加者と CAN-DO リストに基づく指導法と評価について意見を交換していた。

CAN-DO リストは「感動リスト」

続く第2部では、福島県耶麻郡猪苗代町立中学校教諭の渡部真喜子先生が、「CAN-DO リストを活用した授業の展開～生徒の英語力・動機付けを高める指導～」というテーマで実践報告を行った。渡部先生は、平成26年に文部科学省主催の「英語教育推進リーダー中央研修」に参加し、平成24年から26年まで3年間 CAN-DO リストを活用した英語科授業の実践をまとめた論文は第31回東書教育賞中学校部門で最優秀賞を受賞した。



報告は、平成24年度当時、まだ文科省からの「CAN-DO リスト作成の手引き」がなかった頃に渡部先生が感じた事を話すところから始まった。「評価基準との違いは何なのか、何を目指しているものなのかが明確ではなかったため、これでは CAN-DO リストを作っても形骸化するだけではないか」と感じた渡部先生は、「Students First」を心がけ、「生徒が使える CAN-DO リスト」の作成を目指したと言う。その際に気をつけたことは、生徒ができなかったことを書くリストではなく、生徒それぞれが「自分ができること」を実感できるリストを作ることだった。「CAN-DO リストは生徒と教員の実態に合わせて作られるべきであり、それゆえ自校オリジナルのものであるべきだ」と渡部先生は話した。

実際に渡部先生が作成した生徒用の CAN-DO リストには、様々な工夫が施されている。例えば、自己評価の欄には生徒たちが各自「自分ができること」を自由に記述することができる記入欄が設けられていたりする。この CAN-DO リストを使用した指導を行なった結果、3年間を通して多くの生徒が外部試験(GTEC Core for Students)で徐々に点数を伸ばしていった。渡部先生は、自由記述欄が生徒のライティング能力を大幅にあげる要因になったのではと説明した。同様の成長はスピーキング能力においても見られ、生徒の1人は「先生、CAN-DO リストは『感動リスト』ですね」と、嬉しさを伝えてきたそうだ。

渡部先生は、変化は生徒だけでなく自分自身(教師)にもあったという。教師として CAN-DO リストを使って3年間授業を行い、「あるトピックに対し、自分の考えや気持ちを、経験を踏まえて書かせること(表現の能力)」が重要だと気づいたことで、その後の定期テスト問題の作り方に大きな変化が起った。例えば、ライティングの問題では生徒自分自身のことについて書かせる問題が増え、評価の視点・ポイントには文法などの正確さだけでなく「意味が伝わるか」といった項目を加えた。生徒が空欄にしないで頑張れる場所、すなわち、やる気を削がない採点と評価を意識してそのような形となったそうだ。

これからの課題としては、CAN-DO リストの客観性を上げることで生徒・教師がより使いやすい CAN-DO リストへ改訂していくことや、実際の実力と CAN-DO リストを使用した評価の「乖離」をいかに無くしていくかなどが挙げられた。参加者は、英語科以外への応用や CAN-DO の考え方の浸透、学習支援ツールとしての効果的な使い方などについて真剣に考えているようだった。

CAN-DO in real life, not in classroom

セミナーの最後である第3部では、ブリティッシュ・カウンシルアカデミック・マネージャーのロビン・スキプシーによるワークショップが行われた。強調したのは、CAN-DO のコンセプトを再確認し、「授業内で『できる』のではなく、実際の生活で『できる』(CAN-DO in real life, not in classroom)」ということが重要、という点だ。CAN-DO という考え方を実際の教育現場で実践するには、CAN-DO がどのように教師にとって役立つのか、またはどうすれば生徒が上達を感じられるかという点を理解する必要がある。今回のワークショップでは、CAN-DO の具体的な実践方法について模擬授業形式で進められた。CEFR-J* の CAN-DO ステートメントから、リスニングでは「はっきりと標準語で話されれば、日常身近なトピックについての議論の要点を理解することができる。」、スピーキングでは「相手が協力的であれば短い社会的なやり取りができ、理解させることができる」という目標を取り上げた。



模擬授業は、リスニングを取り上げ、プレ・リスニング (Pre-listening)、リスニング (Listening)、ポスト・リスニング (Post-listening) の 3 段階で行われた。ここでは、ブリティッシュ・カウンシルの無料オンライン教材 LearnEnglish Teens の教材が使われた。プレ・リスニングの初めにウォームアップとして、学習者がリスニング教材について持っている関連知識を利用できるように、実際のリスニングの内容に関係する簡単なテーマを参加者に与え、隣同士で質問する活動を設けた。今回のリスニング教材の主題は、「勉強時にメモを取ることが苦手な生徒とそれについてアドバイスをする生徒の間での会話」であった。続く語彙のチェックでは、和製英語やカタカナ語になっているため間違いやすい単語の確認を行った。このプレ・リスニングの活動でテーマに関連して興味付けを行ったり、話し言葉の特徴について確認をしたりするアクティビティなども行った。会話の最初の部分を聞かせることで、学習者もつ心理的負担を軽減し、よりスムーズにリスニングの内容に入っていく工夫が紹介された。リスニング本編では、全体の会話を聞きながら、聞き取れたフレーズに番号をつけたり、True/False 問題で内容理解を行った。

最後のポスト・リスニングでは、リスニングの内容を学習者の実体験と関連させたスピーキング活動を紹介した。今回は、勉強時に自分が苦手だと感じることについて、お互いにアドバイスを与え合うという内容だった。その際に使う英語表現をリスニング教材から抜き出して使うことで、実生活でも使える表現方法に授業で触れることができる。実際の生活と関連したアクティビティを行うことによって、先にあげた「CAN-DO in real life」という実践例を示した。



今回のセミナーは、講演、実践報告、ワークショップを通して、参加者にとって CAN-DO リストを使用した具体的な指導法や評価、またその効果についての理解をより一層深める機会となった。一方で、渡部先生も指摘したように、いかに CAN-DO リストの効果的な使い方などを教育現場に定着させていくかということも今後考えていかなければならない課題である。参加者は、登壇者や他の教育関係者とセミナー後も交流を深め、より良い英語教育のあり方について積極的に意見交換を行っていた。

* CEFR-J

ELP Can do Descriptor Database (2013) 東京外国語大学野由紀夫研究室

http://cefr-j.org/download.html#elp_cando_descriptor_database